



高山西ロータリークラブ

例会報告

第 2 6 3 0 地区 岐阜県 濃飛分区 創立 1 9 6 6 年 1 月 1 5 日

- 例会日 毎週金曜日 12:30~13:30
- 例会場 高山市花里町 3-33-3 TEL 34-3988
- 大垣共立銀行 高山支店 4 F
- 会長 古橋 直彦
- 幹事 遠藤 隆浩
- 会報委員長 塚本 直人



冬の滝 蜘蛛 康介

<会長の時間>

先の日曜日、飛騨高山ピックアップで開催された「高山市スポーツ少年団大会・交流会の場」でスポーツ少年団に対し西ロータリークラブからの助成金をお渡しして参りました。



さて、17 世紀はじめごろ、京都の上層階級だった本阿弥光悦と扇屋の絵師、俵屋宗達が出会い、新たなスタイルの芸術が誕生しました。それが後の日本美術界に多大なる影響を与えることとなった「琳派」です。王へんに林と書く「琳」の字と画家の集団の狩野派の「派」と書きます。今年は琳派 400 年記念の年と言う事で京都では展覧会やイベントが数多く開催されていますし、雑誌にも取り上げられています。私も平安神宮近くにある「琳派」のコレクションを数多く所蔵する細見美術館に何回か足を運びました。

その「琳派」ですが、皆さんは「琳派」と聞いて何を思い浮かべますか？建仁寺にあります俵屋宗達の「風神雷神図屏風」でしょうか。それとも尾形光琳の「燕子花図（かきつばたず）」でしょうか。

今から 400 年まえ 1615 年京都鷹峯の地、位置的には金閣寺の北辺りに、本阿弥光悦が徳川家康から土地を拝領し工芸を家業とする親類縁者を集め、芸術家の村「光悦村」を作ったのが「琳派」のはじまりとされていますが、その頃は「琳派」という言葉は存在しません。刀剣の鑑定・研磨などを家業とする名家に生まれた本阿弥光悦は「寛永の三筆」と称された書家であり、蒔絵、陶芸などあらゆる工芸にも優れたアートプロデューサーとして京都の文化を牽引します。本阿弥光悦のバックボーンにあるのは日本の四季を描いた「やまと絵」狩野派などとは大きく異なり、日本本来の美意識に戻るといえるものでした。40 代で絵師・俵屋宗達と出会い、その類稀な画才を見出します。そして本阿弥光悦に出会った俵屋宗達は「風神雷神図屏風」という極めて革新的な作品を生み出します。その後、時を超えて絵師たちによって作風が継承され、琳派の代表作として今に伝わっています。

本阿弥光悦と俵屋宗達の時代から 100 年、時は元禄時代、京都の超高級ブランド呉服商の次男に生まれた尾形光琳は抜群のデザインセンスを着物、帯はもちろん蒔絵、陶器などあらゆるジャンルで発揮しました。装飾性の高いきらびやかなデザインは尾形光琳の特徴であります。

「琳派」とは、大正時代に美術史（歴史）関係の人が創り出した言葉だそうです。宗達から 100 年ほど後に絵師となった尾形光琳の「琳」をとって名付けられた名称です。尾形光琳は俵屋宗達に傾倒

し「風神雷神図」の模写も行っています。ここが「琳派」の大きな特徴で、琳派は世襲ではなく、師弟関係もありません。直接教えを受けず、ひそかに師と仰いで、模範して学ぶことから生まれたのです。時代の天才画家尾形光琳が、100 年前の天才画家俵屋宗達に感動し、個人的に尊敬や憧れと才能を捧げることで出来上がった大変稀な画派（絵画の流派）ということです。

琳派では私淑でつなぐ琳派といえます。私「わたくし」と淑女の「しゅく」と書きます。直接に教えを受けないが、ひそかにその人を師と仰ぎ尊敬し模範して学ぶ、俵屋宗達に私淑する…、琳派が狩野派などと大きく異なるところです。また尾形家は俵屋宗達や本阿弥家と姻戚関係にあり、尾形光琳は俵屋宗達の作品をよく学んでいます。「風神雷神図屏風」を手本に、尾形光琳は同じ図柄の屏風絵を遺しており、「琳派」は俵屋宗達や本阿弥光悦から生まれたといつてよいのです。

「風神雷神図」の模写を行った絵師に酒井抱一がいます。尾形光琳から約 100 年後のことです。酒井抱一は姫路城主の次男として江戸に生まれました。酒井抱一は俵屋宗達と尾形光琳、そして彼らを生んだ京都に憧れ、京風の絵を描きましたので江戸琳派と称されています。また、酒井抱一に見出された画家に鈴木其一がいます。鈴木其一が描いた「杜若」の一部が、2004 年大阪ドームで開催された国際ロータリー国際大会を記念して発行された切手に抜粋されています。

<幹事報告>

◎ガバナー、ガバナーエレクト、地区職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕部門委員長より

- ・地区職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕部門合同研修セミナー開催のお知らせ
- 日 時 2月14日(日) 点鐘11:00 終了16:30
- 場 所 岐阜グランドホテル
- 出席要請者 現次期会長、現次期幹事、現次期職業奉仕・社会奉仕・国際奉仕委員長

◎ガバナー、地区会員増強部門委員長より

- ・クラブ会員数別増強討論会開催のお知らせ
- 日 時 3月26日(土) 討論会13:00~15:50
- 場 所 じゅうろくプラザ
- 出席要請者 現会長もしくは幹事、次期会長もしくは幹事、現もしくは会員増強委員長

<受贈誌>

可茂加RC (会報)

世界へのプレゼントになろう

例会報告

＜出席報告＞

区分	出席	Make-Up	出席者数	会員数	出席率
前々回	30名	4名	34名	45名	75.56%
本日	29名	—	29名	45名	64.44%

＜本日のプログラム＞ 会報委員会

委員長 塚本 直人

本日の会報委員会は、ゲストに中日新聞高山支局長 嶋津 栄之様をお招きしました。早速略歴をご紹介します。

1964年生まれ、愛知県岡崎市出身。立命館大学文学部卒業、88年に中日新聞社入社。一宮支局を振り出しに東海本社報道部(浜松市)や名古屋本社生活部、岐阜支社報道部(岐阜市)、社会部デスク、生活部デスクなどを経て、今年4月から高山支局長。

「ノーベル賞報道の舞台裏」と題し、梶田隆章さんのノーベル賞をめぐる報道についてご紹介いただきます。宜しくお願い致します。



「ノーベル賞報道の舞台裏」

中日新聞高山支局長

嶋津 栄之 様

東京大宇宙線研究所の梶田隆章さんがノーベル物理学賞を受賞した。スウェーデンでの受賞式などが今も連日報道されているが、この長い長いノーベル賞報道の始まりは、そもそも10月6日の夕方からだった。

中日新聞高山支局には支局長以下4人、下呂、飛騨市に1人ずつと、計6人の記者がいる。ふだんは飛騨地域の行政、警察、観光など、地域に密着した話題を取材し、読者に届けている。正直言ってニュートリノとか、スーパーカミオカンデとか、難しい学術的な話題に接する機会はさほどない。ただ、毎年10月、

ノーベル賞の時期が近づくと、本社からカミオカンデ関係者に注意せよとの指示は来る。飛騨通信部の記者はそれなりに勉強し、準備はしているが、毎年のように現場で待機し、過去に何度も空振りに終わっている(芥川賞や直木賞も同様)。ある意味、毎年恒例の「お祭り騒ぎ」みたいなものだが、今年は事前に「宇宙の年」「カミオカンデ関連で日本人が有力」などの予測があり、「もしや」に備えて午後6時すぎには記者を飛騨市神岡町のカミオカンデに配置した。やはり多くのマスコミが待機しており、7時前にはネットやテレビで受賞が分かり、大騒ぎになった。

記者生活の中で、こういう世界的なニュースに遭遇することはめったにない。だが、実際に起きたことは、本人がいよいよまいまいと、きちんと報道しなければならぬ。新聞記者は常に知らないことに向き合い、現場に駆けつけて見聞きしたことを取材する。そしてなんとか理解し、皆さんに分かるような記事にするのが仕事。科学に全くの素人が何をどう取材するか。

その前に新聞社には社会部、科学部、生活部、運動部などいろいろな部署があり、ふだんは違うフィールドを担当し、違う紙面を主に担当している。高山支局は飛騨版や岐阜県版、運動部は運動面など。ただし、ノーベル賞のような大ニュースがあれば、力を合わせて紙面を作る。受賞翌日の10月7日付朝刊の記事コピーを見てほしい。この日の紙面は、大きさに言えば新聞社の実力、腕を問われる、いわば総力戦で作上げたものだ。

まず1面は東京本社科学部や名古屋本社社会部の専門記者が書いた予定稿。ほぼ事前に準備したもの。3面の解説記事も同様で、何年も前からノーベル賞受賞に備えて書きためた原稿だ。そしてこの日のために特別に設けた広告なしの1ページ「特設面」、そしてテレビ欄の裏面にある社会面、第2社会面と続く。このうち高山支局で担当したのは特設面にある「カミオカンデ 歓喜再び」と、「いつかもうと」神岡の研究者ら安堵という、現地の様子を伝える記事だ。

とはいえ、カミオカンデに梶田さんがいたのは何年も前の話。現在の梶田さんは東大にいて、東京の記者が取材する。高山では神岡の施設にいる後輩の研究者の声、その場の雰囲気などを見たままに書くしかない。もちろん、施設にはどんな人がいて、梶田さんとはどんな関係か、周囲にはどんな人がいて、どう喜んでいるか、事前に声をかけて準備しておいた。後の部分は予定稿や社会部の取材などの記事で埋まっている。社会面と第2社会面は主に東京、名古屋の社会部、科学部、さらには梶田さんが住んでいるのが富山市なので、富山支局も協力し、奥さんの話を取材した。記者がいない場所だと共同通信など通信社の原稿を使うこともあるが、今回は関東から、北陸、東海地方と中日新聞の記者がすべているエリア。ほとんどが自前の原稿で紙面を埋めることができた。

ノーベル賞ともなれば本記、解説、受賞者の人間ドラマ、周

世界へのプレゼントになろう

例会報告

困の反応、用語説明、過去の経緯など、書くべきことは山ほどあり、1日の紙面では載せられないほどの記事が集まる。その中から、本社の編集部門、つまりレイアウトをする整理部や社会部のデスク、編集幹部などが、どの記事を載せるか、限られた時間と紙面の中で判断し、まとめていく。新聞というのは、各地からいろんな情報を寄せ集め、1つの紙面、いわば作品を作りあげる。その意味ではモノづくりと同じだと言える。

また、ノーベル賞のような大ニュースがあると、報道はその受賞後から本格的に始まると言ってもいい。隠れたエピソードはないか、地元の様子は、家族は、大学は…などと取材対象は拡大していく。高山支局でも翌日は岐阜支社から記者とカメラマン、高山支局からは記者2人を神岡に出して、喜びに沸く町の様子、にぎわう道の駅などを取材し、連日掲載していった。そして同時に地元の課題なども発掘する。次の記事コピー「悩めるカミオカンデ」は、まさに地元ならではの記事。地元の人にはご存じのことかもしれないが、一般の読者は「光電子増倍管が並ぶ写真や映像が出るたびに、あの光景が見られる」と思ってしまう。地元の道の駅に模型はあるが、カミオカンデは巨大な貯水タンクで、決して中に入ることはできない。読者の「なぜ」という部分にこたえた、タイムリーな話題だと思う。

最後に今、進行中の重力波を観測する大型望遠鏡「カグラ」について。神岡鉱山のある茂住は富山県境に近い。梶田さんをはじめ、研究者の多くは富山市内から通っている。今回のノーベル賞報道も最初は岐阜や名古屋の記者だったが、地元紙以外は途中から東京や富山の記者が来た。交通の便利がいいからだ。取材のマスコミ窓口も富山県の記者クラブになり、梶田さんのカミオカンデ入りも富山経由で連絡が来て、東大の会見も富山大で行われた。実際、富山大の研究者は東大のプロジェクトに参加し、交流もある。研究の前線基地としての役割を高めている。地理的に遠いハンディはあるが、岐阜大はこのままでいいのだろうか、北陸の紙面に載った記事を参考にしてほしい。

これは余談だが、中日新聞は11月18日、神岡小学校で梶田さんと小学生のネット対談も実現させた。地元紙として、子どもたちが夢を感じられるようなことをと東大宇宙線研究所にお願いした。ただ、梶田さんは超多忙。与えられた時間はたったの20分。できるだけたくさんの子に質問をと、校長の協力もあって事前に質問を10個考えていた。しかし、実際は梶田さんの返事は的確、かつテンポが早く、正味の対談時間は16分ほどで終わってしまった。梶田さんの機転の聞いた回答に「さすがノーベル賞」という声もでた。

<ニコニコボックス>

●古橋 直彦さん、遠藤 隆浩さん

中日新聞支局長 嶋津栄様のご来訪を歓迎いたします。御講話よろしくお願ひします。

●塚本 直人さん

本日は会報委員会の担当例会です。講師として中日新聞高山支局長の嶋津 栄様をお迎えし、新聞紙面づくりの御苦労や裏話を披露していただき勉強させていただきます。とても楽しみにしております。気持ち良く卓話を引き受けて頂きありがとうございます。

●大村 貴之さん

12/6 高山市スポーツ少年団大会が行われました。古橋会長が出席され、少年団に助成金をお渡しいただきました。お忙しい中ありがとうございました。

●黒木 正人さん

飛騨信用組合では明日12日(土)から25日のクリスマスまで、本店さるぼぼサロン棟でプロジェクションマッピングを行います。プロジェクションマッピングとは、ひだしの建物の形状を利用してそこに立体的な映像を映し出すものです。飛騨の四季の美しさをテーマに平日は6時7時8時、土日祝は5時6時7時8時に上映しますのでご家族お誘いの上ご覧下さい。

●井上 正さん

先日日枝中学校にて租税教室の講師をさせて頂き、職業奉仕の精神で務めさせて頂きました。拙い教えではありましたが納税の大切さはお伝え出来たかと思っておりますので、伝えた以上は納税できる会社を目指して頑張ろうと思っております。また明日、明後日は全国中学校駅伝の応援に行き、日枝中駅伝部の活躍をしっかり見守りたいと思っております。日枝中づくしの日々ですが限りある機会、楽しんでお役に立ちたいと思っております。

●下屋 勝比古さん

ブラックブルズの激励会が終わりシーズンが始まります。1/11高山でゲームがあります。声援が力になります。是非ビッグアリーナへお越し下さい。

●田中 晶洋さん、米澤 久二さん、中島 弘人さん

ノーベル物理学賞を受賞した当代宇宙線研究所長の梶田隆章さんは恒例となっているノーベル博物館の椅子にスーパーカミオカンデの名前を記されました。飛騨がまた一つグローバルになった気がします。